

Title	羅馬人の都市生活(中)
Sub Title	
Author	島田, 久吉 (Shimada, Hisakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.59(425)- 83(449)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

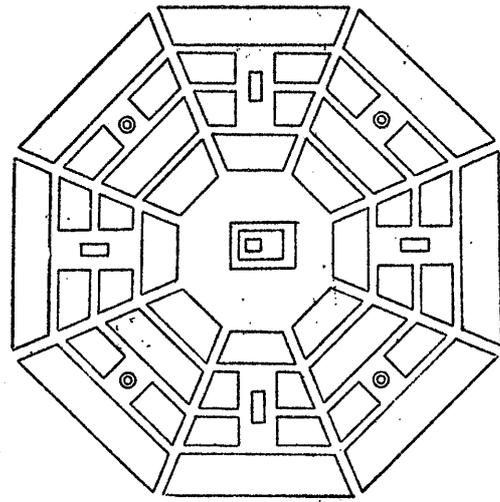
羅馬人の都市生活（中）

島田久吉

六

マークス・ヴィトルヴィウス・ポリオ (Marcus Vitruvius Pollio) は有名な建築論十篇 *De Architectura* Decem の著者として知られてゐるが、本書の有名なる割に著者の傳記は詳かでない。ローマ市外のフォルミエ (Formiae) に於て、ヴィトルヴィア一族に關する碑銘が發見せられて以後、おそらく同地の出生であらうと推定せられてゐる。アウグスツス大帝に仕へたことは彼の書中に自ら語つてゐる處であり、同書が同帝に獻じられてゐることから見ても間違ない。建築論十篇の論理的方面、並びに歴史的方面は希臘の先覺の諸著作から編纂したものであることは、彼自らその出典を第一、第八兩卷に擧げてゐるところでも分るが、其の實際的方面は彼自身の實際上の經驗の産物であらう。ヴィルトヴィウスの名はフロンチヌスのローマ水道史にも擧げられてをり、プリニウスの博物史中に述べられてゐる建築論は彼の所

説を其のまま借用したものである。本書は久しく湮滅してゐたが、十五世紀に至つてスウィイスのサン・ガル市から發見せられた。殊にルネサンスに於ては本書の及した影響は甚大であり、プラマンテ、ミケランゼロの如きは、ヴァイトルヴィウスの熱心なる研究者であつたと云はれてゐる。



ヴァイトルヴィウスの理想型

ヴァイトルヴィウスの所論の多くは理論的に正確であるばかりでなく、現今の状態に應用して見て猶適切なるものが甚だ多い。これ餘談ながら、少しく彼の所説を窺はんとする所以であるが、但し彼の思想を以て直にローマ人一般の都會觀を代表するものと見做す譯ではない。畢竟、彼は一個の天才であり、恐らく時流を抜くこと數段であつたであらう。しかし天才の思想も、時世の制約を受けざるを得ないものとするならば、彼の都市論も結局ローマに於る都市生活の重大性の一の反映と思はれないことはないのである。ローマ人の都市生活一般を紹介せんとする本小篇に於て聊か彼に觸れて見るのも之の意味に於るに過ぎない。

都市計畫及び建築に關するヴァルトヴィウスの根本原理を最も簡單に云へば、第一に適合・整頓であり、第二に均齊・統一であり、第三に經濟である。彼の適合と言ふ意味は各部がその個々の目的に對して、全體の中で之に相當する大きさを與へられると云ふことである。整頓とは各部を之に適當なる地位

に配置すると云ふ意味である。この適當なる配置を論ずるに當つて、彼は三の方法を擧げ、即ち平面圖法、立體圖法、配景圖法の三方法による検討を必要とし、單に平面的な考慮のみを以てしてはならぬと主張してゐる。次に均齊とは即ち調和であつて、例へば高度と幅員、あるひは間口と奥行の調和の如きが之である。之の點は『美とは全體の與へる好ましい外観、好ましい趣味と、並びに、各部分が相互によく釣合の取れた寸法とによつて生まれるものである』と云ふ彼の思想からの當然の結論である。また統一とは茲ではシンメトリーと云ふ意味であり、次に經濟とは、目的と之に對して利用し得る手段もしくは資力を考慮して其の間の最善を計ることである。以上の原理は甚だ抽象的であるが根本原理としては誠に卓見であり、過古現在將來を通じて變らざる都市計畫の指導原理と云ふべきであらう。

次に具體的問題に入つて、第一に都市の建設であるが、都市の建設に際して彼の最初の關心は土地の選定である。都市の敷地としては健康地を選定することが一番肝心なことであつて、之には高燥な土地、沼澤地のない處、氣候の溫和な場所が適當である。ヴィトルヴィウスは健康と云ふ點を非常に重視して、古代人が永住地を擇むるに當つては先づ其の土地に土著してゐる動物の健康状態を調べて、然る後、決定したと云ふ例を引いて世人の注意を促してゐる。健康地に次いで都市敷地の條件としては第二に食糧品の豊富なる土地、第三に道路あるひは河海による交通の便利なる土地が之である。この三條件を具備してゐる土地が都市の敷地として最良なることは彼に限らず、古今を通じて何人も異論のない處

であらう。扱て土地の選定が終れば次に都市の恰好であるが、ヴィトルヴィウスは都市の恰好は四角形であつてはならぬ、多角形でなくてはならないと主張してゐる。蓋し、外敵の攻撃を受くる場合に敵の動靜を觀望するのに最も都合の良いのは多角形の都市であつて、四角形の都市は防禦に甚だ困難であると云ふ。之の點に至つては、彼の都市計畫の最大の關心は都市の防衛と云ふことになる。之の防衛の問題は獨り都市の形態論のみでなく、都市計畫に當つて第一に考慮すべきは城壁と次いで公共建造物にありとする所論にもあらはれてゐる。即ち都市建設に當つて最初に立つべきプランは城壁及び公共建造物の一般配置である。言ふまでもなく、今日の都市に於ては防衛の問題はもはや昔日の如き重要な意義を占めてはゐない。寧ろ宗教的、軍事的要素が次第に後退して、經濟的、社會的要素が進出して來たのが、都市發達史上に於る近代的意義であるが、それでも今日の都市が軍事的考慮を全く脱却し去つたものではない事は勿論である。新興トルコが軍事上の必要からその首府をスタンブルからアンゴラに移した如きは之の例である。少くともヴィルトヴィウスの時代に於て、彼が都市計畫に軍事的考慮を第一義に置いたのは當然のことであつた。

城壁線の設計が終り、その内部に建造すべき公共建造物の配置が定まつてから、第二に計畫すべきは殘餘地域の處分であり、第三に道路の配置である。彼の體系に於て現今の都市計畫から見て甚だ興味あるのは之の點すなはち地域の處分を第一とし道路の配置を後廻しにした事であらう。今日の都市計畫に

於ては屢々あまりに道路に重點を置き過ぎて、先づ道路の計畫を決定した後、この道路計畫に準據して地域の決定をなす事が見受けられるが、これは聊か順序を顛倒したものと云はれぬことはない。道路計畫を真先に決定したが爲に却つて都市計畫自體が自繩自縛に陥つてゐる例は往々、見受けられる處で、この點ヴィルトヴィウスの見解の方が寧ろ實狀に即してゐると思はれる。道路の設計について今一つ面白いことは、道路は風向きを考慮して配置すべしと云ふ說で、今日に於ても火災の頻出する都會は主として道路の方向が原因であることに鑑れば之の說は誠に示唆する處が多い。恐くはローマ市及び地方都市が屢々火災に惱まされたことから思ひ及んだ實驗上の說であらうが將來、都市計畫に當つて忘る可からざる原則であらう。

次に、都市の中心であるフォーラム (Forum) に就いては、若し都市が海岸に近接してゐる地位にあるならば、可成く港に接近してゐる處に設くべしと云ひ、亦、都市が奥地に位するならば、都心に設くべしと論じてゐる。而してその規模は人口の多寡に準ずるものとする。之の點に關してはギリシヤ人のアゴラ (Agora) が實によく都市の大小に相應してゐるものとして、彼はギリシヤ人の都市建設技術を讚美してゐるのである。

最後にヴィルトヴィウスは豊富にして清潔なる給水と、同時に排水、下水の重要性を強調してをり、更に劇場その他の休養器關の位置について衛生上の注意を與へてゐる。又、建築物の高度はその面する

道路の幅員と中庭の廣さに相應すべきものと説き、特に室内の採光と云ふ點については多大の考慮を拂つてゐる。斯かる原則を無視したことが歐米近代都市發展に於て若干の最惡なる社會的經濟的弊害の因をなしてゐることを思ひ合せれば、古人の説の必しも陳腐ならざるを覺ゆる次第である。

七

ローマと云へば水道、水道と云へばローマを思ふ程ローマと水道とは縁が深い。全くローマの水道は餘りに有名であり、敢て説明を加へる迄もないのである。故に本小篇の順序上、至つて簡単な紹介に限り度い。

勿論ローマ人は水道の創設者ではない。今日までの發見に依れば世界最古の水道はニネヴェ市に築造せられたセナケリブの水道であると云はれ、又、印度支那のアンコール・トム(Angkor Thom)の發掘に於ても水道の遺跡が残存してゐると云ふ。ギリシヤに至つては紀元前六百二十五年にメガラ(Megara)の町へ水道を建設した技師ユーパリヌス(Eupalinus)の名が傳へられ、アテネは近傍のヒメトス(Hymettus)ペンテリクス(Pentelicus)の丘からアクエダクトを以て水を引き以て市内の泉水を滿したものであつた。然し乍ら、太古の水道は飲料用と云ふよりも寧ろ灌溉用として築造せられたものであらうし、アテネの水道と雖も飲料水の問題を解決したものでなかつたことは各戸が天水槽を具へて雨水を貯藏してゐたこ

とによつて知られる。して見れば近代的意味に於て水道を完成したものは實にローマ人の功績なりと稱して差支へないであらう。

ローマ市に於る最古の水道は紀元前三百十三年アピウス・クロードゥスによつて、今日のアピア街道を行くこと七哩ばかりの邊にあるアクア・アピア(Aqua Appia)と名くる泉から引いたものである。トラーキヌス帝の水道長官フロンチヌス(Frontinus)の傳へる處によると、之の水道が出来上つた以前と云ふものはローマ人は四百五十年間に互つて、チベルス河や市中の泉もしくは井戸を鑿つて飲料水を求めてゐたものである。之の時代、市中に廿三の泉があつて、其の内の二三は醫療にも靈驗があつたと言ふ。ローマ市が存外、飲料水に恵まれてゐたと思はれるのは、キケロがローマの建設者を譽むるに『泉の豊富なる地を擇んだ』Locum delegit fontibus abundantem ことを以てしてゐるに徴して知れる。兎に角、アピア水道以後、水道は次第に發達して、帝制時代に入つては、少くとも延長七哩より五十哩に及ぶ大小十四の水道を設け、その全延長、大凡そ三百六十哩にもほつた。然かも其の大部分は地下水道であつたと云はれる。但しローマの水道は今日の如く個々の家へ引管した場合は甚だ少く、大體、市中の泉に導入して市民は之の共同栓から搬水したものである。コンスタンチヌス大帝の治世に於てローマ市内には十一のテルメと九百二十六の公共浴場と千二百十二の泉と二百四十七の貯水槽があつたと傳へられてゐる。次に水道全部の給水量であるが、之には色々の推定があり、フロンチヌスの時代に於て、

或は一億三千万ガロンと云はれ更に多くは三億三千万ガロンと云はれる。しかし之等の數字は何れも過大であり大略、七千五百萬ガロンが相當の算定とされてゐる。七千五百萬ガロンとしても今日のローマ市の使用量を凌駕してゐるのである。今日、歐米の都市に於て一日一人當りの水道給水量は、田舎の小都會に於て大體二十ガロン、商工業の大都會に於て四十ガロンと云ふのが標準であるが、當時のローマ市の人口を假に百萬人としても、七千五百萬ガロンは非常に豊富な給水量と云はなくてはならぬ。勿論ローマに於ても之の水量が全部、日常生活に用ひられた譯ではなく一部はカンパニアの灌漑用水であつた事は丁度今日の水道の一部が工業用水に使用せられてゐるのと同じである。

ローマに於る永道施設の特徴は水源地を各所に求めて、大小十數個の水道を設けたことで、之の爲に斷水の危険なくして各種の水道の修理が可能であつたことである。今日の都市に於て、一個所の大水源地から一個の大水道を設けた處では、修理、故障あるひは其の他の理由で往々斷水の苦しみを市民にかけることがあるが、斯かる經驗はローマ人の知らざる處であつた。之の點は甚だ羨望すべきである。されどこれ以上に羨望すべきはローマの水道が全く無料であつたことで、之の點今日の都市は到底ローマに及ばないのである。

云ふ迄もなくローマ人はローマ市のみならず地方の都市にも水道を建設したが中にも、ニーム、パリ、リオン、メツ、セゴヴィア、セヴィーラの如きは甚だ有名であり、メツの水道に至つては其の一部は千

八百年を距る今日に至るまで使用せられてゐるのである。しかし之等の水道の大部分は中世期に潰滅し、近代の水道工事は十六世紀の末葉に至つてまた新たな曙光を見るに至つたのである。

八

以上述べた様に、ローマに於る上水道が今日の目から見ても、一の驚異に値するに引きかへて、其の他の衛生設備は甚だ不完全なものであつた。市民の日常生活が排泄する汚物の處分が如何に行はれたか分り明ならず、恐くは造營奉行 (Aediles) の所管の下に公有の奴隷が之の役目を帯びたものと推察せられるが、これも單なる想像に過ぎない。道路も汚穢塵埃の堆積に委しられたことは、先きに一言した處で、之の點に於てローマ市の状態は清潔と云ふ文字からは甚だ遠いと云はなくてはならない。一體、ローマ市に限らず、昔の都市はその城壁の雄大、その建物の壯嚴、その裝飾の華麗に比して、清潔と云ふ點は頗る不釣合であるらしく、手近な例を挙げれば現今の支那の舊城内の如きものを彷彿する様に思ふ。ルイ十四世の盛時に於てすら、ヴェルサイユ宮殿の内部に一種の惡臭が漂つてゐたと傳へられてゐるのを以ても、それ以前の狀態が忍ばれる。とかく吾々は古代の豪華に幻惑せられて、例へばバルテノンやタヂ・マハルやアヤソフイヤ等の華麗莊嚴を見るにつけ、到底今人の及ぶ難きを覺へて、一種の過古讚美に墮り、その結果あらゆる事物を美化して考へる癖を有するものであるが、現實の狀態は莊嚴華麗と汚

穢不潔とが、同時に併存してゐたものである。勿論、不潔の方面のみを強調して徒に暴露趣味に墮する必要はないが、舞臺と樂屋とでは相當距離のあることだけは文化史の研究家の忘れてはならぬ處であらう。甚だ奇矯の説の様に聽へるかも知れないが、近代都市の文化史上の地位は外觀に於る低下及び平均化と、内部生活に於る向上及び標準化にありと云はれぬ事はない。少くとも清潔度の如何は都市發達史上に於て輕視すべからざる要點である。之には、近代科學の發展、なかんづく醫學、衛生學の進歩に負ふ處あるは云ふまでもない。巴里に比して何等誇るべきモニュメントを有せざる柏林市民が口を開けば同市の清潔を誇るのは往々人をして微笑せしむる點である。餘談は扱て措き、初期ローマ市に於る衛生状態は甚だ悪かつたのは間違ひない處であらう。しかし乍ら、ローマ市民は決して之の状態を放置して満足してゐた譯ではない。公共衛生の改善に關しては各種の努力を拂つたものであつた。上水道の建設も之であるし、下水の築造、道路の舗裝、共同墓地の整備、醫療組織等みなその努力である。

第一に下水工事であるが、無論ローマ人は下水築造の元祖と云ふ事は出来ない。已にサルゴン一世時代のバビロニアの都市エシュンナの遺跡からは大規模な下水道が發掘せられてゐるし、ブレイルヌフ・オード氏の報告によれば、印度のシンド州のモヘンジヨ・ダロ並にパンデラプ州のハラッパに於ては五千年以前に下水を暗渠として道路の排水を圖つたことが發見せられた。斯くの如きは二三の例外と見るべきかも知れないが、都市に於る衛生施設の問題が如何に古い問題であつたかを知るものとして實に興

味が深い。

傳説によればローマ市に於る下水工事は夙にエトラスカ時代タルクイニウスの頃から初められた様であるが、之れが事實としても、勿論原始的なものに過ぎなかつたらしく、下水として有名なるは所謂大下水 (Cloaca Maxima) である。この大下水はローマの諸史家、リヴィウス、プリニウス、ディオニシウス等の書中に賞讃せられてをり、大體、紀元前四五世紀の築造であらうと推定せられてゐる。猶、近時の調査の結果、この外二三の下水の存在が證明せられ、孰れもクロアカ・マキシマに匹敵するものと云はれてゐる。而して之等の下水は全部チベルス河に注込んでゐるものである。勿論、これ等の下水を以てしてもローマ市の下水設備は甚だ不完全たるを免れないが、現今に於てすら、都市の下水工事は非常に不宗全であつて、世界第二の都市と稱せらるゝ我が東京市の現狀に鑑みても一概にローマ市を嗤ふことは出来ない。抑も、下水設備の程度を以て其の都市の文化状態が測定せらるると云ふ人がある位ひ、下水設備は最も遅れたる設備であり、之を思へば、その時代に比してローマ市の下水は決してローマ人の恥ではないと云へやう。但し、ローマ市の下水の缺陷は汚水、汚物の排泄と同時に雨水の排水に使用したことであつて、之の爲に道路に沿ふて各所に開口を設けた故に、ここから有毒な瓦斯を發散し市民の健康に有害であつた點である。更に亦、已に述べた様に、凡ての下水がチベルス河に注いだ爲に同河の水を甚しく不潔にしたのは大缺陷であつた。蓋しローマ人は同河で浴したり或は泳ひたり、時として

は飲んだ事さへありと云ふから、其の害推して知るべしである。

ローマ人はローマ市のみならず、地方の都市にも下水を築造したもので、北アフリカの一小植民市チムガドに於てすら立派な下水があつた。中にもケルンの下水は非常に有名で同市の下水工事は十九世紀に至つて初めてローマ時代の夫れに匹敵し得たと傳へられてゐる程である。

次に今日の都市は大抵皆孰れも市立病院を經營して公共衛生の一助としてゐるが、凡そ病院に類似したものと見るべきものは古代ローマには存在しなかつた様である。況して公營の病院は絶對になかつた。抑も病院らしいものが存在し出したのは基督教の勢力が盛んになつて以後のことであり、病院に關する最古の記述を有する文獻は聖ゼロームだと云はれてゐる。即ち三百六十年にファビオラと呼ぶ人が自分の別荘を提供して行路病者を收容し醫療を受けさせたと云ふのが之であると云ふ。其の後、中世期を通じて、病院の經營は教會の仕事と見做され、十三、十四世紀頃、都市が病院を經營し、或は都市が醫師を雇つた例があると云はれてゐるけれども、嚴格な意味に於て、病院經營が都市の事業になつたのは十八世紀に入つて後のことである。この間の事情は今日に於てすら慈善病院の多くは猶依然として宗教團體によつて經營せられてゐることが最も明白に語つてゐる。蓋し今日の都市事業のうちで相當重要な部分を占めてゐる教育、衛生、社會事業等は過古に於ては教會の一手に引き受けてゐた處であつた。政教分離は國家政治に於ても近代の一大特質であるが、都市政治に於ても同様の現象が見られるのであ

る。

最後に、カルナリウム (Carnarium) と云ふものの本態を今日の觀念に當て嵌めることは不可能であるが、初期ローマ市の埋葬方法は甚しく野蠻且不潔極るものであつたらしい。そこで長日月の間に各種の改良が企てられ、特にアウグスツス大帝の宰相マエケナスによつて大改良が加へられ面目を一新したと傳へられてゐる。

兎に角、上下水道の建造、道路の舗装、並にこの公共墓地の改良によつてローマ市の衛生状態は著しく改善せられた事は疑ひない。前に述べたキケロがローマの地域を目して、瘴癘の地と呼びながら、直に然かも猶健康地なり (*in regione pestilenti salubris*) と付け加へてゐるのは、恐く衛生改善の努力が其の時代已に相當の効果を收めてゐた證左と見る事が出来やう。

九

ローマ人はギリシヤ人と同じ様に、教育を以て公共の事業とは思考しなかつた。故にローマには公立の學校と云ふものは存在しない。尤も教育が公共の事業、ことに都市の事業となつたのは比較的近代の事に屬するから、ローマ市に公立の學校がなかつたのは敢て怪しむに足りない。富裕なる人々は子弟の教育の爲に家庭教師を雇ひ、資力なきもの、子弟は私立の學校に通ふか、或は全然教育を受ける機會を

持たなかつた。ローマ市には之の私立の學校——と言つても勿論今日の學校に比すべきものではないが——に三階級の程度があつた様であるが、已に私立であるから茲には問題にならない。今日我が邦の都市が莫大な教育費支出の脅威を受けてゐるのから見ればローマの事態は都市當局者の羨望に値する處かも知れない。然らばローマ市當局は教育に對して全然無關心であつたかと云ふに必しもさう許りとは云へぬ。即ちローマに於ては教師と名のつく者は凡ゆる階級を問はず公共の負擔、言ひ換へれば租税を免除せられてゐたのであつた。之の點は又頗る推賞べきで今日の教育家の羨望すべき事態である。

學校と並んで今日の都市教育事業の一は公立圖書館の建設維持であるが、凡そ文化史上に於て圖書館ほど長い歴史を有するものは稀であらう。今、この圖書館史の極く大要に觸れるさへ尤大な紙數を要するから、本小篇の能くする處ではないが、既に埃及の中世期に於てすら圖書館の存在が考證せられてゐる。アッシリヤ、バビロニヤに於る存在は歴然たるものであり、ギリシヤ、マケドニアの時代に至つては今の目から見て一の驚異とさへ言はれてゐる位である。中にもペルガムス、アンチオキア、アレキサンドリアの夫れは史上に燦然たる光輝を放つてゐる。しかし乍ら凡て是等の圖書館は皆、王者あるひは貴顯富豪の私有であり、その最古の性質はヘリオポリスの遺跡が語つてゐる様に寺院に附屬してゐたものと思はれる。本邦に於ても圖書館の濫觴と思はれるのは天應年間の頃、石上宅嗣と云ふ大納言が其の舊宅に一寺を建立し、その一隅に圖書室を設けて之を芸亭と稱し、好學の徒の需めに應じて書籍を閲覽

せしめた故事である相だ。抑も、現今に於て圖書館の種類は、大體、國立、公立、私立の三種であるが、市政問題に關するものは、云ふ迄もなく公立であり、而して之の公立圖書館も私人の寄進によつて地方團體が之を引受けたものが多いのである。嚴格な意味に於て、都市の經營にかゝる公共圖書館は千八百四十七年ボストン市に設置せられたるものを以て嚆矢とするが、更に詮索すればフランスのアンゼル市の圖書館は千三百七十六年より、ブールジュの夫れは千四百六十六年より市立となつたと傳はつてゐる。大體に於て、古代中世を通じての圖書館は私人もしくは教會の所有であつた。圖書館の建設維持が自治體の事業になつたのは最近のことに過ぎない。

ローマ市に於る最初の市立圖書館と見做すべきはアシニウス・ポリオと云ふ人が自らアヴェンチヌスの丘の上に建てたるものをローマ市に寄附したと云ふ話しであらう。之の圖書館がどの程度、今日の市立圖書館に近い性質を帯びてゐたものか、遺憾ながら分明でない。次いでアウグスツス帝は皇妹の名を冠したるオクタヴィア圖書館と、パラチナ、アパリニス圖書館の二つを建立し、チベリウス帝、トラヤース帝も夫れど其の名を以て呼ばるる圖書館を建設した。藏書數全部で五六十萬冊と推定せられてゐる。オクタヴィア圖書館の如きはメリスと云ふ司書官の名さへ傳はつてゐる。千九百卅二年の世界年鑑によれば三千冊以上の書籍を擁する圖書館の數は六千四百廿九であつて、之中、都市によつて經營せらるるもの千四百四十二である。又、アメリカ圖書館協會の調査では、書籍數の人口に對する割合

は一萬人以上の人口ある都市では平均一人當り三冊が最高であり、二十萬を超える人口の都市では一人一冊當てが普通であると言ふ。もしローマ市の全圖書館の藏書數が果して六十萬冊とすれば市内人口六十萬として甚だ興味ある數字を示してゐる。然し乍ら、之がどの程度、市民によつて實際利用せられたかは非常に問題であらう。

希臘人と異つて甚しく現實的な人種であつたローマ人の教養に對する關心がどの位のものであつたか、斷ずることは不可能であるが、ローマの神田とも稱すべき書店街にアルギレツム町あり、之はフォラムとサブラ區との中間に位する區域であつた。之の區域には書店 (Librarii) や寫字店 (Antiquarii) が軒を並べて入口には新刊書の廣告や價格を貼り出して、時には著書の肖像まで掲げてあつたと云ふ。ローマ市のみならず、地方の都市にも、皆圖書館があり、屢々引例するチマグドの様な邊疆の一小都會さへ市立圖書館を有したことを思へばローマ人と雖も教養に無關心であつたとは云はれないであらう。

十

凡そ史上に於てローマ人ほど戶外の享樂生活を營んだものは類がないであらう。之の點ギリシヤ人も相當なものであつたに違ひないが、ローマ人に至つては寧ろ極端と稱することが出来る。ローマに於る各種の催物はギリシヤに於けると等しく、其の起源を宗教上、並びに軍事的訓練に發するものであらう。

が、ローマに於る娯樂、休養機關は特別な意義を帯びるに至つたのである。正治自義を自ら守るに於て、既に共和時代の後期に至つては各種の娯樂機關はその本來の祭儀の附隨物たる性質を失ひ、専ら政治家の人氣取り政策に利用せらるる様になつた。然らば帝制時代に入るに及んで全く民心收攬の方便に墮したのには怪しむを須ひない。カリグラの如き暴虐極りなき帝王すら、催物の豪華なりしが爲に、其の死を哀惜せられたと云はれ、最も貧慾なる帝王セヴェルスすら之に大金を投じて猶利ありとなし、ローマ史を通じて最良の帝王と稱せらるるマークス・アウレリウスさへ之を廢する事は出来なかつたのである。勿論、かゝる催物は最初は政治家もしくは帝王の任意に催したものであつたが、間もなく一の不可避的な義務に變じて仕舞つたのである。ローマ市に所謂プロレタリアが陸續として入り込む様になると、之等怠墮な浮浪民を繰縦し以て騷擾を防ぐが爲に、政府は食料の配給を行つたが、衣食足つて禮節どころの話でなく、一層これら浮浪民の閑居不善を止らしむる事が必要となつて來た。斯して、詩人ユヅエナルの『パンとサーカスと』(Panem et circenses)と云ふ言葉は當時の大衆の欲望を一言にして道破したものである。この事態は先づアレキサンドリヤの町に始つたと云はれてゐる。兎に角、ローマに於る食料と娯樂機關は民衆の絶體的權利となり、所謂の負載の相續(Damnosa hereditas)としてあらゆる新政府に要求せらるる様になつたのである。之がローマに於る娯樂施設の特異なる政治的意義であるが、之の外にも若干の意義があつた。共和時代に於る選舉運動と之等催物の關係は後段市政の腐敗の處で述

べるが、已にキケロの時代に於て彼はキルクス、アンフイテアトルムを以てコミティアと並んで輿論の發表場と見做してゐるのである。共和時代の政治家は觀覽物に出席して觀衆の歡迎振りによつて自己の人氣を付度したものと云ふ。例へば紀元前五十九年、ケーザルの反對派は劇場、競駕場に於て拍手喝采を以て迎へられ、之に反して、ケーザル一派は彌次と怒聲につゝまれたと云ふ話しがある。キケロ自身も其の入場に際して熱狂的喝采を受け反對派の罵詈が全く聽へなかつた事を非常な誇りとして語つてゐる。帝制時代に入つて民會が其の意義を失つてからは、催物は大衆會合の唯一の機會であり、大衆がその態度、傾向、希望、不平を發表したのは實に斯る場所に於てであつたのである。タキトスに依れば劇場その他に於て民衆は甚だ露骨に且無遠慮に其の態度を表明したらしい。また各種の催物は皇帝をして大衆に接觸せしむる機會を提供した。故に皇帝が大衆の人心を收攬せんとすればする程、之等の催物に臨御したのである。随つて觀衆に對する態度も一般に懇懃謙遜であつたと傳へられてゐる。

演技が以上の様な政治的意義を有する上から、其の費用が政治家もしくは政府の負擔であつたのは蓋し當然である。現今に於ても巴里、伯林その他に國立、公立劇場あり、又、市立の演技場もその例に乏しくはないが、之等は孰れも其の費用の一部を國費或は公費によつて援助せらるるに止り、費用の全部を國費、公費または政治家の負擔として一般觀衆に無料で公開する例は甚だ乏しいのである。強いて例を求めれば、祭日に於て各種の餘興物を自治體の負擔に於て觀覽せしむるが、公園等に於て隨時、音樂

の無料演奏を行ふて市民をして自由に享樂せしむるに止るのである。之れとて勿論、何等政治的意義を有するものではない。

ローマに於ては劇場、競馬場、演技場その他の娛樂機關は全部無料であつたのである。而してその費用は最初は國費によつて支辨せられたものであり、祭典の一部と見做せられてゐたから、その興行は政府の義務であつたのである。故に此の目的の爲に國費の一部が充當せられ、例へば紀元前二百十七年のローマ祭(Ludi Romani)の爲には廿萬セステルチウスが計上せられてゐる。然るに共和時代の末期、祭日が次第に政治的意義を帶ぶるに至つて、この爲に一般の寄附を募る様になつたらしい。プリニウスの傳ふる處によれば、紀元前百八十六年に於て富裕なる市民は殆んど残らず、スキピオ・アジアチクス主催の演技に若干金を寄進したと云ふ。一方に於て、政治權力が次第に少數者の手中に集中されると共に、他方に於て、觀覽物の規模が次第に増大して來たが爲に、その費用を國費のみによつて支辨する事が出来なくなつて來たのが、かゝる事態の發生した原因であらう。かくして次第に負擔は政治家の肩にかゝつて來た。而して最も普通な方法はルデイを主宰する役員が自ら財布の紐をほどいたものであつた。そこでアポロ祭を除く費用は造營奉行エヂレスの負擔となり、更にプレートルやコンスルの地位に野心を抱けば競争者と出費の高を競ふ様な事態になつた。之の一例は紀元前七十年に於て時のエヂレスであつたセンプロニウス・グラックスが彼のルデイの爲に莫大の金額を支出し其の結果、屬領の住民を

搾取したが爲に元老院が個人の支出額を制限せんとしたことである。併し、かゝる制限は無論實行されず、キケロの如き君子人さへ造營奉行として、ローマ祭、母神祭、花神祭を主催した程で、彼の如き餘り富裕でなかつた人が之を如何に賄つたか、恐らくは莫大な借財を残したに相違ないと思ふ。キケロにして然り。其の他の野心家に至つては思ひ半に過ぐるものがある。爲に、ケーザルは二千五百萬セステルチウス、アントニウスは四千萬セステルチウスの借財に及んだと言はれてゐる。ローマに於て娛樂機關が如何に政治と密接な關係にあつたか知れやう。

以上ここでは單に娛樂機關の一般政治的意義を述べただけであるが、無論之はローマ市の市政問題たるのみならず、一種の國政問題であるから、之の點は今日の市政から論ずる譯にはゆかない。扱て嚴格な意味に於る市政問題としての娛樂機關に都市社會學の方面の問題であり、市政論の問題としては縁が薄いのであるが、最近に於て都市が著しく市民の休養、體育機關に意を用ひて來た事を思へば將來、重要な市政問題をなすと思ふから、ローマ市の娛樂、休養施設を一瞥するのも敢て無駄ではなからう。但し之の方面にはフリードレンダー、ファウラー氏を始め詳細な研究があり、又、一般にも最もよく知られてゐる方面であるから以下簡単な紹介に止めやう。

ローマ都市に於る公共の娯樂休養機關としては競駕場キルクス(Circus)演技場(Amphitheatrum)劇場(Theatrum)大浴場(Thermae)あり、猶、市民の運動場としては廣場(Campus)遊歩場(Porticus)が其主なるものであつた。之等のうち競駕則ちチャリオット・レースは最も古く最もローマ人の嗜好に投じたものであつたらしく、其の起原は恐らく軍事的訓練にあつたものであらう。則ち騎兵部隊の訓練にあつたもので、今日各國に於ける競馬が馬匹改良を少くともその看板にしてゐるのに比らべて甚だ面白い事である。リヴィウスによれば最初のレースを行つたのは遠くロムルスの時代であると云ふ。少くとも最初のレース場を設けたるは第四王アックス・マルチウスであると云はれる。紀元前三百六十四年に於て初めてエトルリヤから俳優がローマ市に入り込み、最初の芝居興行を行つた以前に於ては、之のレースが國家に依つて設けられた唯一の娯樂であつたと云はれてゐる。最大のレース場は有名なキルクス・マキシムスで史家ディオニシウスの傳ふ處によれば收容人員十五萬に及ぶと算定せられる。この外、紀元前二百廿一年に建設せられたキルクス・フラミニウス、カリグラ帝の建設にかゝるキルクス・ヴァチカーヌス、最後にマクセンチウス帝のキルクス・マクセンチウスがある。

次に劔闘士(Munera)の演技はリヴィウスに據れば紀元前二百六十四年に初めて催されたもので、同百五年までは私人の主権にかゝりフォーラムやキルクスに於て興行せられてゐた。而して百五年に至つて初めてコンスルによつて興行せられたのである。之の競技も競駕と同じく初めは兵士の訓練を目的と

したもので、即ち武道振興に資したものであつたが、後には單なる觀覽物に墮したのである。キケロの傳へる處では、之の催は全階級の市民が最も喜んだもので最多數の市民が演技場に殺倒したと云ふ。ローマ市に於る演技場は例の有名なコロシウムであるが、之は紀元八十年チトス帝によつて開かれ、收容人數五萬人と推算せられてゐる。

次は劇場であるが、而してローマに於る芝居の變遷は甚だ興味ある問題であるが、茲には到底之にふれる餘裕はない。初期ローマに於ては芝居は餘り歓迎せられず、娛樂機關としては最下位にあつたらし、之には種々の理由があつたが、ローマ人は希臘人と異り、軍國的國民であつたが爲に多く殺伐な演技や競駕を好んで、文學的な芝居を好まなかつた事にもよるが、一には反希臘思想が甚だ旺盛であつた爲に、ギリシヤ式劇場の建設に敵意を持つて居た事に歸せしめられてゐる。その爲か芝居が決して不人氣であつたと云ふ譯ではないが、長い間政府は永久的の劇場の建立を禁止してゐた。ローマ市に於て初めて永久的の劇場建築をなしたのは紀元五十五年ポンペイウスが建てたものである。それ以前は一時的の舞臺をフォーラムやキルクスにしつらへ、再び之を取りこはしたもので、今日で云へば所謂小屋がけであつたらしい。タキトスの傳ふる處では、ポンペイウス時代に至つてさへ劇場建造に反感が去らず、彼は之の劇場建設に對して固陋な昔風の市民からギリシヤの都市を眞似るものとして相當の非難を受けたと云ふ事である。抑もローマといへどもギリシヤの文化を輸入して開化したのであるが相當の程

度に達すると輸入元の文化を排斥しだしたのは、今日の國々にも屢々見られる處で誠に古へ猶今の如しと思ひ出されて、苦笑せしむるものがある。遮莫、之の劇場は石造の壯麗なるもので、ヴィトルヴィウスは四萬人の觀客を容れたと云つて居るが少しく誇大に失し大體一萬人位ひの收容力ならんと想像せられてゐる。其の他ルキウス・コルネリウス・バルブスの寄附した劇場は八千人、アウグスツスの養子カルケルスの建てたる一萬四千の座席があつたと云ふ。

以上、最も簡短な紹介でも分る通り、ローマ市に於る觀覽物の收容人員は實に尨大な數字を示してゐるものである。今日に於て、何れの國でも民衆の最大の娛樂機關は云ふ迄もなく映畫であるが、その最も發達してゐる合衆國の例に徴するに、千九百卅一年に於て、その總數一千三百萬に達し而して、毎日の觀客千五百萬を算すると云ふ。則ち全合衆國の人口のうち大凡そ八人に一人が其の一日の一部時間を之等劇場に費す事になる。また大ニューヨーク市に於てはあらゆる劇場を綜合して、其の總數五百二十七として、その座席四十五萬五千六百廿五であり、同市の人口に對する座席數の割合は十二・三なりと調査せられて居る。共に驚嘆すべき數字には異ひないが、ローマ市に於る觀覽物の總座席數に比して果して如何であらうか。勿論ローマに於ては各種の催物の開催せらるるのは所謂祭日(Ludi)の日に多く現今の如く毎日營利的に興行せられてゐるものではなく、その祭日とは母神祭(Ludi Megalenses) (四月四日——十日) アポロ祭(Ludi Appollinares) (七月六日——十二日) ローマ祭(Ludi Romani) (九月五

日——十九日)平民祭(Ludi Plebei)(十一月四日——十七日)であつたが、帝制時代に入つては芝居の興行せられる祭日が實に百日の多きに達したと云ふ事である。其の他穀神祭(Ludi Cereales)(四月十二日——十九日)花神祭(Ludi Floralia)(四月廿八日——五月三日)戰勝祭(Ludi Victoriae)(十月廿六日——十一月一日)に於て其の他の催物が行はれるのを見れば、ローマ人は殆んど娛樂の爲に寧日なき有様であつた。十五萬人を收容すると云はれるキルクス・マキシムスの競技が行はれるのは主として、九月のローマ祭であるが、もし當時のローマ市の人口を八十萬とすれば其の觀衆は殆んど市の住民五人に一人の割である。しかも共和時代に於ては奴隸は入場を許されず、競技に奴隸の參觀をゆるしたと見るべき文獻はネロの時代に於るコルメラの記述中にあるのが最初であるとせられる。とに角如何にローマ人がかゝる娛樂機關を愛好したかは之を知るに充分である。

以上の觀覽物の外に例のテルメがある。テルメの事は略するが、アグリツパよりコンスタンチヌス大帝に至る迄無慮十數個の大浴場あり、中にもデオクレチアヌスの浴場は千六百人ほど容れたと云ふ。之等の中には勿論皇帝の私用もあつたが、多くは公共の俱樂部に供したものである。殊に一般民衆の爲にも一例を擧ぐればアグリツパは紀元前三十三年に於てローマ市に百七十個所の無料公衆浴場を設けたと云ふ。かゝる遊山湯のみならず、又療法に關する温泉の施設もなし、チボリの近傍の Bagni や Aquis

Grannum (今日のエイクス) Aquae Aureliae, (今日のバーデンバーデン) 英國の Bath の如きは皆ローマ

人の創建にかゝる。フランス於ては今日、温泉地に温泉療養所（エタブリスマン、テルマール）を設けて國營或は公營にしてゐるが之は恐らくローマの故智に倣つたものであらうか。ランチアーニ氏の踏査によると以上の娛樂機關、休養機關の遺跡のローマ市中に残れるものは往時の千分の一にも達せずと云ふ。此の外廣場（Campus）が澤山あり、現今の都市に於ては其の面積の一割を之等の休養場に充當するのが都市の理想とされてゐるが、ローマの各都市に於ては勿論この點、超理想的であつたのは云ふ迄もない。ローマ市以外の地方の都市も大體ローマ市に倣ひ、之等の娛樂機關を有せざる處もなく、ポンペイの如く二、三萬の小都市にさへ二の大劇場あり、アオスタの劇場の如きは屋根によつて被はれてゐたと云ふ。之等の設備が如何に都市の財政を苦しめたかは何人にも容易に想像せられる事であらう。